

落合芳幾展 作品解説

執筆：日野原健司（太田記念美術館主席学芸員）

1 卯の二月十日 金性の人有卦ニ入る

嘉永5年(1852)、歌川国芳の美人画にコマ絵を描くことで浮世絵師としてデビューした芳幾であったが、その2年後となる安政元年(1854)より、単独で錦絵を仕上げるようになった。本図は、一人前の絵師となった芳幾の最初期の作例。有卦（幸運の年回り）に入る人への贈答品として制作された、有卦絵と呼ばれるジャンルの浮世絵である。「ふ」の字で始まるおめでたいものが7つ（ここでは富士山、筆、藤娘、富士太郎、文箱、福助、二股大根）描き込まれている。

2 かづらのあてもの

歌川派のリーダーである歌川国貞（三代豊国）と合筆している珍しい作品。題名となる右側の部分を国貞が、それ以外を芳幾が手掛ける。子ども向けのおもちゃとして作られたもので、枠の中の小道具を当てるゲームのようだが、作品の一部が欠けているらしく、具体的な遊び方は不明である。

3 源平盛衰記 長門国赤間の浦に於て源平大合戦平家亡びるの図

芳幾が大判3枚続の大画面の浮世絵を手掛けるようになったのは、安政3年(1856)頃からである。本図は、大判3枚続の武者絵としては早い時期の作例であろう。平安時代末、平家が滅亡することになる長門国赤間関の壇ノ浦での戦いの様子である。画面中央では、源義経が八艘飛びをしている。すでに歌川国芳がこれと同じ場面を描いており、芳幾が手本としたことは間違いない。国芳の作品に比べると、武者たちが入り乱れ、画面が煩雑になっているが、少しでも迫力ある場面に仕上げようとする芳幾の気概が感じられる。

4 源平盛衰記 伊豆ノ図山木合戦

源頼朝の部下である加藤景簾が山木兼高（兼隆）の屋敷に夜討ちをかけている場面。ただし、当時の人たちは、明智光秀が本能寺の織田信長を急襲する場面を重ねて見ていたことであろう。なお、こちらの作品も、すでに歌川国芳が同じ場面を描いている。国芳の作品を左右反転させると本図とほぼ似たような構図となることから、やはり芳幾が国芳の作品を手本としていたことは間違いない。

5 猛虎之写真

万延元年(1860)5月、生後8ヶ月の豹がオランダ船より横浜に連れて来られ、7月下旬から江戸の西両国広小路で見世物とされた。題名は虎とあるが、描かれているのは明らかに豹。当時、豹は雌の虎と勘違いされていたためであろう。生きた鶏が餌として与えられており、芳幾はすぐさま見世物を実際に取材して描いたと考えられる。なお、芳豊や暁斎、広景など、多くの絵師たちがこの豹の見世物を描いている。

6 五ヶ国於岩亀楼酒盛の図

安政6年(1859)6月に横浜が開港すると、外国人たちの姿や暮らしぶりを題材とした横浜絵が制作されるようになり、芳幾も数多く手掛けた。本図は、横浜の岩亀楼という妓楼で宴会をする外国人たち。椅子に座る男性たちは、左から、フランス人、アメリカ人、ロシア人、イギリス人、オランダ人。そこに美しく着飾った花魁たちも同席しており、彼らの前で中国人が余興の踊りを披露している。

7 東海道中栗毛弥次馬 序文

弥次郎兵衛と喜多八が東海道を旅する十返舎一九の洒落本『東海道中膝栗毛』。原作にはないエピソードを仮名垣魯文が脚色し、芳幾が挿絵を描いた揃物が「東海道中栗毛弥次馬」である。本図は版元である当世堂こと品川屋久助が本シリーズの口上を述べたもの。五十六番続とあるが、本図を除いて全部で五十八図が確認されている。

8 東海道中栗毛弥次馬 日本橋 品川

弥次郎兵衛と喜多八が東海道を旅する十返舎一九の洒落本『東海道中膝栗毛』。原作にはないエピソードを仮名垣魯文が創作し、芳幾が挿絵を描いている。上の日本橋では、弥次喜多が豆売りから懸命に値切ろうとしている。下の品川では、喋りながら歩いていた喜多八が、すれ違った飛脚の担いでいた棒に顔をぶつけてしまった。

9 東海道中栗毛弥次馬 水口 石部

上の水口では、弥次喜多が吹き矢の屋台で遊ぶ。矢が的に当たるとからくり仕掛けの妖怪が動き出す趣向。驚いている間に財布を盗まれてしまった。芳幾の落款が、十返舎一九にちなんで、「芳一九画」となっている。下の石部では、弥次郎兵衛が宿の若い娘の寝床に忍び込もうとする。しかし、間違っ母親の寝床に入ってしまう、互いに吃驚仰天。

10 弥次郎兵衛と喜多人

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』より、藤沢の茶屋で一休みする弥次喜多。冷えた団子を焼き直してもらったのだが、喜多人は消し炭がくっついてことに気が付かず口に入れてしまい、熱い熱いと大騒ぎ。遠景に見えるのは藤沢の遊行寺。歌川広重の「東海道五拾三次之内 藤沢 遊行寺」（保永堂版）と酷似している。なお、落款の書体により、明治2～5年（1869～72）頃の作と判断した。

11 江戸砂子々供遊 妻恋いなり

芳幾にしては珍しい、遊びまわる子どもたちを主題にしたシリーズ。妻恋稲荷とは、現在の東京都文京区湯島3丁目にある妻恋神社のこと。氏子の子どもたちが祭囃子の練習をしている。横笛や太鼓、当り鉦を演奏する子もいれば、稲荷神社らしく狐の面を被って神楽鈴を鳴らしている子もいる。

12 当世流行端唄のはんじもの

端唄とは、江戸時代後期に庶民たちの間で流行した、曲の短い三味線音楽のこと。その歌詞が判じ絵となっているが、現在では伝わらないものもあり、判読できないものも多い。例えば、左上は、「く」と書かれた背中に濁点があることから「くぜ」、鶴の上半分から「つ」、「し」と書かれた手から「して」。つなげて「くぜつして（口舌して）」となる。

13 廓の雪光る遊君

柳亭種彦作・歌川国貞画の合巻『修紫田舎源氏』はベストセラーとなり、それを題材とした錦絵が歌川派の絵師たちによって数多く制作され、「源氏絵」と呼ばれた。本図はまさしく源氏絵の一種で、海老茶筥髷という独特な髪型をした中央の人物が、主人公となる足利光氏である。

14 忠臣雪ノ仇討

雪の積もった夜、高師直の屋敷に討ち入った、大星由良之助率いる四十七士たち。柴小屋に隠れていた師直が発見された、「仮名手本忠臣蔵」のクライマックス場面である。画面の中央上に、幽霊となった塩冶判官高定の姿が浮かび上がっているのが、他の絵師の作例と比べて珍しい。なお、四十七士の名前が年齢と共に全員分列挙されている。

15 岡本楼全盛の図

吉原遊廓の京町一丁目にあった岡本楼という妓楼。芳幾の師匠である歌川国芳が、安政2年(1855)、岡本楼の依頼を受けて絵馬を制作している。浅茅が原の一ツ家の老婆を描いたもので、現在でも浅草寺に奉納されている。国芳一門と岡本楼は親しい交流関係にあったのかも知れない。巨大な松に石灯籠や井戸もある立派な中庭が、妓楼の繁栄を伝えている。

16 東海道之内 鮫洲

文久3年(1863)、14代将軍徳川家茂が京都に上洛する際に制作された「御上洛東海道」のシリーズ。多くの作品に武士の姿や行列の様子が描かれているのが特徴で、総点数は162点にもものぼる。国貞や二代広重、芳虎、芳年、貞秀、暁斎など、歌川派の絵師たち総勢16名が参加しているのだが、弟弟子の芳年が8点手掛けているのに対し、芳幾の作品は2点のみである。本図は、鮫洲沖で海苔を採取する様子が描かれている。

17 東海道 京都名所之内 島原

京都にある島原遊廓の花魁。禿が持っているのは、まさしくこの「御上洛東海道」の最初の一図となる、歌川国貞が描いた日本橋の風景。花魁はこの浮世絵に触発されて、旅の行列に加わる夢を思い浮かべているのだろう。芭蕉の門人である其角の俳諧「傾城は賢なるはこの柳かな」が賛として添えられている。

18 今様擬源氏 十五 御法 文覚上人

『源氏物語』の各帖で詠まれた和歌から連想された物語や故事を描く揃物。全部で54図(目録除く)からなり、芳幾にとって初めての大規模な揃物となる。本図は『源氏物語』第40帖「御法」の和歌「たえぬへきみのりなからそたのまるる代々にとむすふ中のちきりを」から、鎌倉時代の僧である文覚上人が、那智の滝で荒行をしている場面を描く。冬の滝壺に七日間入り、意識を失ったところを、不動明王の眷族である金迦羅童子と制多伽の童子が助けにやってきた。師匠である歌川国芳は、同じ場面を豎3枚続の画面に描いている。

19 今様擬源氏 二十一 乙女 浦島太郎

『源氏物語』第21帖の「乙女(少女)」の和歌「をとめ子か神さひぬらし天つ袖ふるきよのともよはひ経ぬれば」から連想されたであろう、浦島太郎が龍宮城でもらった玉手箱

を開けた場面を描く。煙のあたった顔の部分が、年老いた姿に変化している。

20 今様擬源氏 四十一 幻 新中納言平知盛

『源氏物語』第41帖の「幻」の和歌「おほそらをかよふまほろし夢にたに見えこぬたまの行衛たつねよ」から連想されたのであろう。平安時代の武将である平知盛が壇ノ浦の戦いに敗れ、巨大な碇を担いで海へ身を投げる場面を描く。この後、亡霊＝幻となって、大物の浦から出帆しようとする源義経と弁慶の一行らの前に現れた。

21 今様擬源氏 四十八 早蕨 怪童丸

『源氏物語』第48帖の「早蕨」の和歌「此春は誰にか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわらひ」から連想されたのであろう。坂田時行の遺児である金太郎。山の中で熊や猪と共に育ち、この図では、兎と猿の相撲の行司役となっている。金太郎の足元には早蕨が生えている。

22 誠忠岳王図伝

中国・宋の時代に活躍した武将である岳飛。母親の手によって背中に「尽忠報国」の文字を刻まれた。北方から攻撃してくる金に対して幾度となく勝利を収めたが、その名声をよく思わない宰相の秦檜によって謀殺されてしまう。現代の中国でも人気の高い英雄の一人である。本図はどのような場面か判然としないが、兵隊たちの顔や衣服の陰影に、西洋画からの影響、あるいはそれを好んだ師匠の歌川国芳からの影響が感じられる。

23 当世水好伝

当代人気の歌舞伎役者たちが、屋根船に乗り込み、宴会に興じている。彼らの体には立派な彫物があるが、実際に彫物をしていたのではなく、水滸伝の豪傑たちに倣って無頼漢を装った、絵空事の姿として描かれている。

24 季既秋成駒撰眞

慶応元年（1865）8月、守田座で上演された「季既秋成駒撰眞（ときもややみのりのこまひき）」に取材。四代目中村芝翫が演じる鬼若丸である。背景にあるのは役名と役者、役者の紋を表紙とした役割番付。芳幾は同じ趣向の役者絵をいくつか制作している。

25 風俗浅間嶽 十一編

芳幾は幕末期の頃、錦絵だけでなく、合巻の表紙や挿絵も数多く手掛けており、その活動の幅広さをうかがうことができる。『風俗浅間嶽』の挿絵は、初～9編を二代歌川国貞が、10編を歌川国芳が手掛けていて、11～12編を芳幾が担当することとなった。なお、その後の13～14編は再び二代国貞が描いている。

26 昔噺誉比達鬘貞 初編

藤本吐蚊作の合巻『昔噺誉比達鬘貞』全3編のうち、初編上帙と下帙の表紙。この時期の合巻の表紙は鮮やかな多色摺となっており、2冊分の表紙がつながる趣向となっていた。

27 白縫譚 五十二編

『白縫譚』は柳下亭種員、二代柳亭種彦によって執筆された長編ロングセラーの合巻。挿絵は歌川国貞(三代豊国)、二代国貞が手掛けていたが、37編以降を芳幾が担当している。展示しているのは52編上と52編下の表紙で、こちらも2冊をつなげることで、物語の一場面となる趣向になっている。

28 龍宮の日待

日待ちとは、村の近隣の仲間たちが特定の日に集まり、夜を徹してこもり明かす行事のこと。龍宮城にいる、擬人化された海の生き物たちが集まり、それぞれ遊びに興じている場面。タコが8本の足を使って一度に楽器を演奏したり、フグが腹鼓を打ったりと、生き物たちのそれぞれの個性が活かされている。なお、師匠である歌川国芳の「龍宮遊びさかなげいづくし」から、一部のキャラクターを借用している。

29 諸鳥芸づくし

擬人化された鳥たちが、それぞれ得意とする隠し芸を披露している。尻尾の長いセキレイはお尻を振る「尻振り」。目玉の大きなフクロウは目鬘をつける「目まなこ」。スズメは得意の「踊り」。羽根が大きく広がるコウモリは「三番叟」。ウソは嘘の上手い「浮かれ女(遊女)」。声真似が上手なオウムは「声色」。メジロはお尻で相撲をする「押し合い」。ヤマガラは実際にカルタ取りの芸をしていたことから「歌かるた」。

30 当世百面相

歌舞伎の芝居小屋へと足早に向かうおかみさん。昨晚は眠れないほど、楽しみにしていたようだ。簪を落としても全く気がつかない様子。早く大好きな芝居を見たいという、楽しみと焦りがない交ぜになった表情を描こうとした作品。師匠の歌川国芳にも、人間の表情を誇張して描いた錦絵や絵本の作例がある。

31 与ハなさけ浮名の横ぐし

万延元年(1860)8月に市村座で上演された「八幡祭小望月賑」に取材した作品。舞台の歌舞伎役者たちを猫の顔に置き換えている。師匠の歌川国芳は猫好きで知られるが、国芳も「流行猫の戯」という揃物の中で同じ趣向の作品を制作していた。芳幾は師匠の作風を忠実に学習していると言えるだろう。

32 善悪思の案内

顔に「善」や「悪」の文字が書かれている小人たちは、人間の心の葛藤を擬人化した、善玉・悪玉というキャラクターである。山東京伝の黄表紙『心学早染草』(寛政2年[1790])に初めて登場し、その後芝居の趣向にも取り入れられた。中央の気の弱そうな男性、悪玉たちに紐で引っ張られたり、釣り針を目の前にぶらさげられたりしている。おそらく遊廓に誘い込まれているのであろう。右側にいるのは男の身内であろう。善玉の人数は少なく、悪玉にまったく抵抗できていない。

33 マケロマケヌ 売買大合戦

安政6年(1859)の開港以降、日本国内の経済は変動し物価が高騰するようになる。本図は、小判を大将とする貨幣軍と、米俵を大将とする商品軍の戦いで、値段を負ける負けぬと争っている風刺画となっている。画面の右下には、外国のコインを擬人化した姿も見える。

34 見立似たかきん魚

35 見たて似たかきん魚

36 見たて似たかきん魚

人気の歌舞伎役者たちの似顔絵を、金魚や鯰、鯉、亀などの姿で描く。題名の「にたかきんぎょ」は、金魚売りの呼び声である「めだかァー、きんぎょォー」をもじったもの。魚たちの体の模様は、その役者の紋となっている。師匠である歌川国芳も似たような趣向の作品を制作しており、中には「似たか金魚」という全く同じ題名の団扇絵がすでにある。

芳幾は師匠の趣向をそのまま手本にしたと言えるだろう。

37 写真鏡 大象図

西洋絵画の陰影表現を取り入れ、異国の風俗をより異国風らしく描いたシリーズ。周囲には油彩画の額縁を模したかのような枠が設けられている。本図は、極端な陰影を施した象の周りを、西洋の大人や子供が取り囲んでいる様子。象は、明らかに歌川国芳の「唐土廿四孝 大舜」が手本となっている。国芳からの強い影響がうかがえる作品である。

38 写真鏡 涼岳図

山に囲まれた異国の風景。外に置かれた寝台に男が横たわり、背景の山からは激しく水が流れ落ちてアーチ型の橋をくぐっているという、何とも不思議な光景である。寝台の男性は、歌川国芳の「唐土廿四孝 呉猛」を典拠としている。国芳の作品は、幼い呉猛が、眠っている父親が蚊に刺されないよう、自分が裸になって蚊を父親から遠ざけたという伝説を描いているのだが、芳幾の作品はその内容とは全く関係なく、単に異国風のモチーフとしてこの男性を描いている。

39 真写月花の姿絵 三代目沢村田之助

40 真写月華之姿絵 三代目関三十郎

当時の人気歌舞伎役者たちを、横顔のシルエットという奇抜な手法で描いたシリーズ。全部で 36 点からなり、他に目録と口上がある。その口上によれば、障子に人の影を写し取って絵にすることが、風流な人々の遊びとして流行しており、その趣向に基づいて歌舞伎役者の影絵を制作することになったという。

41 くまなき影

波月亭花雪の三周忌追善のために制作された絵本。冒頭には、柴田是真による、花雪の肖像画が掛けられた座敷の図があり、その後、芳幾による興画合のメンバーたちの横顔の影絵、ならびに彼らの略伝や発句、興画作品が掲載されている。ここで展示している左の頁は、芳幾のシルエットである。なお、「真写月花之姿絵」の刊行は慶応 3 年（1867）春。本書は同じ年の秋に刊行された。

42 朝比奈ねむけざまし

朝比奈三郎義秀は実在する武将だが、小人の国や手長足長の国など、いろいろな人種がいる島を巡る物語の主人公としても知られる。本図も、小人の国にいる朝比奈という、これまでしばしば描かれてきた画題だが、慶応4年（1868）という制作時期を考えると、合戦をしている子どもたちが戊辰戦争の見立てになっているのは間違いない。朝比奈が仙台藩、朝比奈側の子どもたちが旧幕府側、朝比奈に立ち向かったり逃げ出したりしている子どもたちが新政府側と読み解く説がある。

43 俳優写真鏡 五代目尾上菊五郎の仁木弾正

44 俳優写真鏡 四代目中村芝翫の白拍子花子

45 俳優写真鏡 三代目沢村田之助の源之助姉里江

輪郭線を排し、色彩の濃淡により写真風の陰影を施した実験的なシリーズのうち一図。当時出始めていた湿板写真による役者の肖像写真を意識したものと考えられている。明治時代になって新たな文化が海外から押し寄せてきていた時期。これまでの錦絵にはない新たな技法を積極的に取り入れようとする、芳幾のチャレンジ精神が伝わってくる作品である。

46 西洋道中膝栗毛 六編上

『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛と喜多八の孫たちが、ロンドンの博覧会を見物しに出かける旅の道中を記した滑稽本。執筆は仮名垣魯文、総生寛。挿絵は、芳幾の他、三代歌川広重、河鍋暁斎が手掛ける。展示している挿絵は、観音開きという珍しい手法によって、普仏戦争の様子を描いている。

47 西洋道中膝栗毛 九編上

右が版元の椀屋喜兵衛、左が作者の仮名垣魯文。このところの西洋ブームに乗かって、何か面白い趣向の書物はないかと、版元が魯文に相談しているところである。芳幾が「一蕙斎芳幾写真」と署名しているところをみると、版元と魯文は本人によく似た似顔絵として描かれているのであろう。

48 西洋道中膝栗毛 十編上

文久2年（1862）、イギリスのロンドンで万国博覧会が開催された。その様子が福沢諭吉の『西洋事情』の中で紹介されているが、『西洋道中膝栗毛』はその書籍を参照して執筆されたもの。展示されている箇所は博覧会の会場の様子として描かれたものだが、当時の庶

民たちは『西洋道中膝栗毛』を通して、博覧会とはどのようなものかイメージを掴んでいたことであろう。

49 一勇齋国芳像

歌川国芳は文久元年3月5日、数え65歳で亡くなった。本図は、国芳の没後すぐに刊行された、追善の意味を込めて訃報を伝えるための死絵。山々亭有人、仮名垣魯文、梅素亭玄魚が弔意の賛を添えている。国芳の死絵は他に歌川芳富も描いているが、門人としてそれなりの立場にいないければ、このような師匠の肖像を描くことはないであろう。国芳の顔の皺が丁寧に描写されており、師匠の在りし日の姿を偲ぶ芳幾の気持ちが込められている。

50 英名二十八衆句 十木伝七

唐使の饗応役である十木伝七は、通辞の幸齋典蔵に逆恨みされ、大勢の前で辱めを受ける。それに憤慨した伝七は、国分寺に忍び入り、典蔵を殺害するという場面。シャンデリアらしき照明器具が、異国情緒を漂わせている。

51 英名二十八衆句 遠城治左エ門

遠城治左衛門と安藤（遠城）喜八郎の兄弟は、末弟である宗左衛門を殺害した生田伝七郎に仇討ちするため、約束の場所である崇禅寺馬場に赴く。しかし、伝七郎の門弟たちによるだまし討ちに合い、兄弟は二人とも殺害されてしまう。本図は、弓を射られ、血だらけとなってしまった兄の治左衛門。月岡芳年が、同じ「英名二十八衆句」の中で、弟の喜八郎が倒れる様を描いている。

52 英名二十八衆句 鬼神於松

鬼神のお松は夫を殺した夏目四郎三郎を討つべく旅に出るが、その途次、強請りや強盗などの罪を重ねる女盗賊となった。道中、敵の夏目四郎三郎に出会い、持病の癩を訴え背負ってもらったところを殺害、本懐を遂げる。本図は、袖を口にくわえ、名刀鬼神丸の血を拭うお松。傍らには、血まみれの四郎三郎が横たわっている。

53 英名二十八衆句 げいしや美代吉

若旦那の縮屋新助は深川芸者の美代吉に惚れ込み足繁く通うが、そのために勘当されてしまう。すでに情夫がいた美代吉は、新助が勘当されたことを知ると冷たく当たる。恨ん

だ新助は、夜船で美代吉を殺害し、自分も入水する。血まみれとなった絶命寸前の美代吉。船の屋根の向こうに新助の横顔がちらりと見えるが、彼女を見つめる眼差しは冷静で鋭い。

54 英名二十八衆句 佐野治郎左エ門

佐野次郎左衛門（治郎左エ門）は、江戸時代中期に吉原百人斬りを起こし、処刑された実在の人物。佐野次郎左衛門は恋慕する八ツ橋に万座の中で愛想尽かしをされる恥辱を受け、数ヵ月後、妖刀を手に、八ツ橋をはじめ多くの人を斬り殺した。次郎左衛門の体にいくつも付けられた血の手形が、残酷な場面をより生々しいものとしている。

55 英名二十八衆句 邑井長庵

村井（邑井）長庵は極悪非道の町医者。長庵の妹婿である重兵衛が、借金のために娘を吉原遊廓に売り、五十両という大金を得る。その金欲しさに、長庵は夜道で重兵衛を殺害。画面を割くような雷の描写が印象的である。殺害後、その罪を浪人の藤掛道十郎に着せるなど悪事を重ねていく。

56 英名二十八衆句 天日坊法策

お三という老婆の娘が将軍のご落胤を宿したが、娘も赤子も亡くなってしまう。ご落胤の証拠となる墨附（文書）と短刀が残っているという話を聞きつけた天日坊法策は、悪心を起こしてお三を殺害。墨附と短刀を奪い、将軍のご落胤を名乗る。本図は、お三を殺害した後、墨附を口にくわえながら、短刀を袋から出す天日坊を描く。

57 英名二十八衆句 国沢周治

国沢周治とは国定忠治のこと。博徒の親分であるが、天保の大飢饉で農民を救済した逸話でも知られる。本図は、国沢忠治を題材にした実録物『嘉永水滸伝』によるもので、敵対する鳴神の音右衛門の首実検をしている場面。巨大な髑髏をいくつもあしらった襦袢（どてら）のデザインが印象的である。

58 英名二十八衆句 西門屋啓十郎

西門屋啓十郎は、曲亭馬琴の合巻『新編金瓶梅』の主人公。尼の陸水の所持金欲しさに、残酷にもマサカリで首を切り落とすという場面。おびただしい血が流れる残酷な描写だが、それは陸水が啓十郎に見せた幻術であった。

59 英名二十八衆句 春藤治郎左エ門

敵討ちのために貧しい身分に身をやつした春藤治郎左エ門。その正体が疑われ、だまし討ちにあうが、なんとか一命を取り止める。体中が血まみれとなり、顔もすっかり青ざめてしまっているが、敵討ちを成し遂げようという意志は強く、その目には力が宿っている。

60 英名二十八衆句 鳥井又助

奸臣の望月源蔵にだまされた鳥井又助は、増水した川を馬で渡ろうとする武士を水の中から襲撃。家老の蟹江一角と勘違いして、殿様である多賀大領を惨殺してしまう。本図は切り落とした大領の首を口にくわえ、その場から逃走する鳥井又助。激しい水の流れと淡い藍色が、場面の残酷さを中和している。

61 英名二十八衆句 鞠ヶ瀬秋夜

鞠ヶ瀬秋夜とは丸橋忠弥のこと。由比正雪とともに幕府転覆を企んだ、慶安の変の首謀者の一人である。本図は、計画が露見し、捕手に囲まれて捕縛寸前の鞠ヶ瀬秋夜を描く。

62 英名二十八衆句 仁木直則

仁木弾正直則は、歌舞伎の伊達騒動物に登場する悪役。龍の衝立の前で、血のついた刀を手に立ちすくむ仁木。門註所での裁判に敗れた仁木が、渡辺外記を油断させて刺そうとするものの、逆に返り討ちにあって倒される場面である。

63 英名二十八衆句 浜島正兵衛

浜島庄兵衛（正兵衛）は、旱魃の際、苦しむ民を救うように裕福な家に協力を求めたが、断られたため、その家の倉庫を仲間と共に襲撃し、食料を貧民に与えた。後に、諸国を荒らす義賊・日本左衛門と名乗り、白波五人男の一人、日本駄右衛門のモデルとなった。

64 時世粧年中行事之内 一陽来復花姿湯

松本楼という吉原の妓楼の内部にある風呂場の様子。風呂場には、遊女に交じって、幼い禿や下働きの男の姿も見える。銭湯のように石榴口が無く、浴槽は開放的な作りになっていたようだ。左側の部屋には、恋文を広げて回し読みしている遊女たちがいる。

65 時世粧年中行事之内 競細腰雪柳風呂

銭湯の様子を詳細に描いた、資料的にも興味深い作品。右端が番台で、そこでおひねりを払って入り、緑の薄縁を敷いた板間で服を脱ぐ。洗い場では小さな子供から老婆まで、大勢の女性たちでにぎわっているが、なにか揉め事があったのだろう。桶を振り上げて暴れる女性を、周囲の人たちが懸命になだめている。左端の、久米仙人の絵が張られたところが石榴口で、ここをかがんで、浴槽に入った。

66 時世粧年中行事内 酌婦天地人極製

1階では酒宴が、2階では遊女たちが身支度をしたり、くつろいだりしている。非公認の遊廓である岡場所の様子、あるいは吉原遊廓が仮宅営業をしている様子を描いたものか。左下、建物の1階奥には手水（お手洗い）を使う女性の姿が描かれているが、この場所が描写されているのは珍しい。

67 獅子王二和賀全盛遊

明治2年（1869）8月、吉原遊廓で行なわれた吉原俄という祭りに取材した作品。仲之町の大通りで、手古舞の男装をした女芸者たちが獅子舞を披露している。女芸者たちはそれぞれ自分の名前を入れた提灯や牡丹の描かれた扇などを手にしている。

68 東京両国川開之図

右側の屋根船は、吉原の遊廓である金瓶楼の遊女たちが乗っている。屋根の上には、五代尾上菊五郎、初代河原崎権十郎、四代中村芝翫といった歌舞伎役者たちが座っているが、なぜか実名ではなく役名が記されている。左側の船には、下谷や日本橋の人気の芸者たち。町の名前が江戸から東京と変わっても、人々の夏の楽しみはすぐには大きく変わらない。

69 江戸町二丁目甲子屋浴室之図

甲子屋という妓楼の室内にあった豪勢な浴槽を描く。その手前には妓楼を代表する人気の花魁たちがずらりと並んでいる。ちなみにこの作品と全く同じもので、題名が「江戸町二丁目」ではなく、「深川」となっているものがある。甲子屋は明治3年（1870）8月頃まで深川で仮宅営業をしていたというので、吉原に戻ってきた後、題名の部分を深川から江戸町二丁目に修正したのであろう。

70 柳光若気競 きん八

人気の芸者を描いた揃物。いずれも和傘を広げた粋な姿として描かれている。本図は「きん八」という芸者。小野小町が雨乞いの和歌を詠んだところ、たちまち大雨が降ったという逸話「雨乞小町」の様子の入った着物を着ている。

71 隅田川花の賑ひ

隅田川東岸、三囲神社付近の花見の景。手前で船に乗る花魁や芸者たちは落合芳幾が、背景の隅田堤のにぎわいは三代歌川広重が描いている。芳幾と三代広重という珍しい組み合わせの作品である。

72 五節句のうち甲喜楼之初秋

甲喜楼は吉原遊廓の江戸町二丁目にある甲子屋という妓楼のこと。その妓楼の看板となる花魁たちが集まって、七夕飾りの短冊に書を書いている。右端の甲子久のみ、No.69「江戸町二丁目甲子屋浴室之図先」にも登場している。

73 東京日々新聞 百一号

話題性の高い記事を選んで錦絵に仕立てた、『東京日々新聞』の新聞錦絵。本図では、2人の子供を残して亡くなった母親の霊が夜な夜な現れるという話を描く。蚊帳の中で眠っている幼子を愛おしそうに抱く母親の幽霊。画中の文章に「文明開化の今日にかかる話は無き事なれば、虚説を伝ふる戒めとす」とあり、幽霊という存在を否定的に捉えようとする意識であったことをうかがわせる。

74 東京日々新聞 百八拾五号

片桐省助は東京府判事となるが罪を犯して流罪となる。本図は、弟である小林次郎が、自らの血で請願書を認め、これから切腹して兄の困苦を救おうとする場面。その後、訪れた友人たちが切腹を止めさせ、血書を衆議院に提出。兄の流罪は解かれることとなった。

75 東京日々新聞 四百三十一号

永代橋の上から川に女性が投げ込まれた女性が、船に助けられている場面。17歳の少女

で、下深川での所用の帰り、永代橋の上で40歳くらいの男性に所持金を奪われ、さらに川に投げ込まれたということであった。揺れる波と、その波越しに女性の下半身が透けて見える描写が巧みである。

七十六 東京日日新聞 四百四十五号

明治6年8月4日午後3時頃、梅村豊太郎が地震で目を覚ますと、そばで寝ていた子供が泣き始めた。枕元を見ると、三つ目の妖僧がおり、その頭はみるみる天井を突き抜けるばかりに伸びあがっていった。豊太郎は妖僧の裾を掴んで、力の限り打ち倒すと、年を経た狸がその正体を現した。本図で、豊太郎の足に踏まれているのが、その古狸である。

77 東京日々新聞 六百九十七号

志摩国、甲賀の浦に棲む人を襲う大ザメが、火事に見舞われて海中に逃げた船の乗組員全員を呑みこんでしまったという事件を伝えている。固い鱗に覆われた、まるで怪獣のような大ザメの描写だが、葛飾北斎の『北斎漫画』に描かれた「わにざめ」を参照している。

78 東京日々新聞 八百三十三号

巡査である錦織熊吉が、芝の楊弓場の看板娘である、お寫、おみつ、お竹の3人を、自分の下宿に招く。酒宴の後、熊吉は3人の女性たちを斬殺してしまう。なぜこのような暴挙に及んだのか、その理由は記されていない。3人の女性が血まみれで倒れているという、「英名二十八衆句」に見られた残酷な表現を受け継ぐものである。

79 東京日々新聞 八百五十一号

男が書齋で酒を飲んでいる最中、外で物音がしたので覗いてみると、先日遠国で病死した義弟の姿が幻となって現われた。足のないぼんやりとした姿で、暗闇の中に浮かび上がっている。本図はもともと、台湾出兵で戦死した義弟の霊が現われたという話として制作されたが、何らかの理由があり、人物たちの名前や居住地、戦死などの具体的な情報を削除した説明文に改めて刊行された。

80 曾我会稽山 時代世話劇種本第一巻

81 心中天網島 時代世話劇種本第六冊目

82 祇園祭礼信仰記 時代世話劇種本第十五編

歌舞伎の主要な演目の筋書きを小説に仕立てた本で、雑誌『歌舞伎新報』を刊行している歌舞伎新報社より刊行された。芳幾は表紙と挿絵を手掛けており、芳幾の役者絵を描く力量を伺うことができる。

83 絵入人情雑誌 第百五十六号

84 絵入人情雑誌 第百五十八号

小説を連載形式で掲載した雑誌。10日に1冊のペースで刊行されている。表紙を芳幾が手掛けている。文章の頁は二段になっており、見開きにつき1～2図、墨摺の挿絵が添えられている。ただし、落款がないため、絵師が芳幾であるかは判然としない。

85 百もの語 牡丹灯籠 九

『東西新聞』の附録として制作された、幽霊・妖怪を題材にした揃物。本図は、師匠である歌川国芳が描いた「四代目市川小団次の於岩ぼうこん」を参照している。ただし、国芳の作品は東海道四谷怪談のお岩であるのに対し、芳幾は落語の怪談噺『牡丹灯籠』のお露の姿に変えている。

86 百もの語 小幡小平治 十

画中に「北斎画」と書かれていることから明らかなように、葛飾北斎の妖怪画の代表作「百物語 こはだ小平二」を模写しつつ、蚊帳の中にいる小平治の妻・お塚の怯える姿を描いている。

87 百もの語 魂魄 十一

目元や鼻、口の周りが青ざめた細長い顔の幽霊。図中に「円山主水図」という落款と「芳幾模写」の印章があることから、円山応挙の幽霊画を芳幾が模写したことが分かる。ただし、この図と類似した応挙の幽霊画は未確認。

88 梅幸十種之内 一ツ家

梅幸十種とは、五代目尾上菊五郎、ならびに六代目尾上菊五郎によって選ばれた尾上家のお家芸のことで、新古演劇十種とも呼ばれる。一ツ家はその一つに数えられる。浅茅ヶ原の一ツ家に住む老婆が、泊まった旅人の命を奪い、金銭を奪っていたという、浮世絵では国芳や芳年が好んで描いた物語である。落款に「朝霞楼芳幾摹」とあるが、国芳の描い

た「浅茅原一ツ家之図」（大判3枚続、安政2年）を大いに参照しているからであろう。この頃より芳幾は、大判錦絵3枚続の役者絵を再び制作するようになる。

89 歌舞伎十八番之内 勸進帳

歌舞伎十八番とは、七代目市川団十郎が市川家のお家芸として選んだ十八種類の歌舞伎演目のこと。「勸進帳」は中でも有名な一番である。本図は、明治23年5月に新富座で上演された「勸進帳」に取材したもので、武蔵坊弁慶を演じる九代目市川団十郎を描く。芳幾は「蕙阿彌」という珍しい画号を用いている。

90 皐月晴上野朝風

「勸進帳」同じ明治23年5月、新富座で上演された「皐月晴上野朝風」に取材した役者絵。五代目尾上菊五郎演じる、彰義隊の隊長・天野八郎が官兵たちに召し取られる場面である。

91 百鬼夜行 相馬内裏

山東京伝の読本『善知安方忠義伝』の一場面。相馬の古内裏を訪れた大宅太郎光国。その前に、平将門の娘である瀧夜叉姫が呼び出した妖怪たちが出現した。巨大な蝦蟇や、平将門と七人の影武者、さらに普通の人々の姿が見える。左下の落款に「北斎風ニテ落合芳幾戯墨」とあるように、葛飾北斎の『北斎漫画』を参照している図が認められる。原作には出現しない妖怪たちばかりだが、本図は当時話題となっていた相馬事件という、旧中村藩主である相馬家のお家騒動を暗示する風刺絵になっていると推測される。

92 歌舞伎新報 一二〇九号

『歌舞伎新報』は、歌舞伎の上演情報や役者の情報を紹介した演劇雑誌。明治12年(1879)に刊行され、明治30年(1897)までの間に通巻1669号を数えた。芳幾は長年に渡り、他の絵師たちとともに、表紙や挿絵を手掛けている。

93 歌舞伎新報 一六二九号

94 歌舞伎新報 一六三〇号

95 歌舞伎新報 一六三六号

96 歌舞伎新報 一六三八号

『歌舞伎新報』では明治 28 年(1895)8 月より刊行された 1613 号より、巻頭に多色摺の口絵を挟み込むようになった。手の込んだ彫りや摺りになっており、その多くを芳幾が手掛けている。なお、最終巻となる 1669 号まで、口絵は制作され続けた。

96 婦女風俗図

芳幾の肉筆画は数少ないが、その中でも緻密な彩色が施された稀少な作品。右隻は遊廓の室内、左隻は武家もしくは豪商の室内を描く。江戸時代末期の制作という見方もあるが、落款、ならびに「恵斎画印」という印章の使用時期から、明治 28~30 年(1895~97)頃の制作と推測した。だとするならば、芳幾が 63~65 歳頃の作となり、晩年においてもこれだけの肉筆画が描かれる確かな技量を備えていたということになる。

97 鍾馗

芳幾が 66 歳の時に描いた鍾馗の図。鍾馗から逃げ出す邪鬼は、芳幾の息子である芳麿が描いている。「十四童落合六郎筆」とあるように、幼名を六郎といった芳麿は、この時まだ 14 歳。芳幾が 50 歳を過ぎてから生まれた子供のようだ。明治 17 年 (1884) に生まれ、絵師の道を志す。芳麿には、晩年の芳幾と合作した肉筆画が他にも存在しているが、大正 3 年 (1914) 9 月 29 日、30 歳という若さで亡くなってしまう。

98 日本演劇 川上と貞奴

99 日本演劇 川上と貞奴

オッペケペー節で知られる川上音二郎と、その妻の貞奴。明治 32 年 (1899) に海外に渡り、劇団を率いて巡業したところ、高い人気を集める。明治 34 年 (1901) に一時帰国し、その後再び渡欧。芳幾は、話題となっていた舞台の様子を、これまでの役者絵とは全く異なる画風で描いている。芳幾はこの時 69 歳。亡くなる 3 年前でありながら、新たな表現に挑戦する姿勢は、好奇心旺盛であった芳幾の性格をよく反映したものであろう。

100 歌舞伎座筋書 第六十七号

101 歌舞伎座筋書 第六十八号

歌舞伎座で上演されていた演目の内容を紹介した筋書 (パンフレット)。挿絵はなく、表紙を芳幾が手掛けている。「七十一叟芳幾」「七十一翁芳幾」との落款があり、72 歳で亡くなる芳幾が前年に描いていた作品であることが分かる。晩年には不遇であったと伝わる芳幾であるが、絵筆を手放すことなく、生涯絵師の仕事を全うしたのである。

102 先師一勇齋国芳翁四十回忌追善書画会 案内状

晩年になり生活が困窮し、借金を抱えていたという芳幾。友人から勧められ、師匠である歌川国芳の四十回忌の追善書画会を開催するが、これはその案内状。著名な日本画家や浮世絵師たちがメンバーとして参加している。なお芳幾はこの追善書画会によって収入を得るものの、逆に借金取りに追われることとなり、夜逃げせざるを得なくなったという。

追加出品 初日影開盛双六

芳幾が挿絵を手掛けていた東京絵入新聞の附録として制作されたもの。芳幾が幕末に好評を博した横顔の影絵を、双六に仕立てた。描かれているのは、市川団十郎や尾上菊五郎といった歌舞伎役者のほか、仮名垣魯文や山々亭有人、河竹黙阿弥といった、芳幾と交流の深い著名人たち。柴田是真も鳥の絵で参加している。